

ご挨拶—学会創立60年にむけて— 理事長 西村成雄

昨年10月21日、22日の両日、和光大学で開催されました第56回全国学術大会の総会におきまして、新たに理事長を仰せつかりましたが、関西部会でお引き受けさせていただいたという気持ちが強く、とりわけ昨年1月に急逝された石田浩関西部会代表の身代わりともいるべき心情のなかにあります。その意味で、より若い世代の登場を期待すべき時代に、いささか古い世代が出ることにある種の躊躇を感じていますが、それ以上に、毛里和子前理事長をはじめ、会員の皆様からの御協力をいただかねばとうていその任に耐えられないことを痛感しております。微力ですがどうぞよろしくお願ひ申しあげます。

さて、いまさら申しあげるまでもなく、日本現代中国学会は1951年以来、同時代中国社会の変動しつつあるあらゆる分野を、その歴史と現実の緊張関係のなかで認識し再定義する課題を設定し、解読し、広義の意味での地域研究としての現代中国学を蓄積し、社会に発信してまいりました。そして、その歴史は今や60年になろうとしています。

このようなそれぞれの時代における刺戟的な論点提示とその解読は、現代中国学会全国学術大会のシンポジウム企画として伝統的に定着しており、今後さらに充実発展させる価値あるプログラムとして継承する必要があると思います。学会誌『現代中国』に掲載されていますシンポジウム一覧によりますと、近56年来の先人、会員の皆様の現代中国認識とその学術的成果は、同時代日本社会の対外認識の重要な一環を構成する中国認識史の蓄積でもあったといえましょう。

と同時に、国際的環境下における中国社会の変容そのものを事実として等身大にとらえ、それら学術情報を総合化する努力を基盤にしつつ、その歴史的現実的意味を読解し、かつ現代日本の中国との関係性をいかに構想し構築するのかという、社会的要請にも応える課題にとりくんできた歴史でもあったといえましょう。

そこで、近づきつつある本学会創立60周年にむけて、現代中国再認識の新段階を解明する課題を設定し、具体化する可能性を検討することは、単に学会内のみならず社会的にも求められていると考えます。たとえば、今日の段階からみて20世紀中国社会に占める中華民国の歴史的段階をどう再認識しうるのか、また現代にいたる中華人民共和国の60年をどのように再定義し今後を展望しうるのか、あるいは、現代中国社会の政治的経済的イデオロギー的全空間にわたる変動と変容を視圈に入れた新たな中国認識の構築、そこから導かれる日中関係性の新段階への展望、国際社会における中国社会の新たな立ち位置など、これらの諸問題を総合的にとらえる必要性はますます増大しています。

学会として、可能ならば、まず2007年度、2008年度の各全国学術大会において、ひとつの案として「中華人民共和国60年を再認識する国際シンポジウム」の開催を、企画委員会のもとで具体化することができるかどうかを検討することを提案したいと考えます。そのためには、募金活動などを含む財政的基盤の充実をはかる必要がありますが、それらを含め今後企画委員会で検討を加えてゆくことができればと思います。その成果は、学会誌『現代中国』に反映するとともに、関連する企画のもとで社会に発信することにつながることを期待したいと思います。

いうまでもなく、このような企画の実現には、学会の基本的な三つの結集点であります全国学術大会、各部会研究集会、学術誌の編集をさらに充実させ発展させることが大前提となります。また、国際交流のとりくみを強めるための措置も考える必要があると思われます。今後、理事会の皆様、新設の副理事長および事務局ともども努力してまいりたいと思います。ぜひ、全会員の皆様の多方面からの御協力を心からお願い申しあげますとともに、学会の日常活動を支える事務局メンバーの皆様への積極的な御支援をお願い申しあげます。

(2007年1月1日)